

# 福祉系 対人援助職養成の 現場から<sup>④</sup>

西川 友理

## 主体的・対話的で深い学び／ アクティブ・ラーニング

ここ数年、教育の現場では、「アクティブ・ラーニング」という言葉が頻繁に使われるようになりました。

アクティブ・ラーニングについて、文部科学省が出している文書には「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。」と書かれています<sup>1)</sup>。

2012年ごろから、文部科学省や中央教育審議会が出す大学教育に関する答

申にこの言葉が現れはじめ、2017年の学習指導要領には「主体的・対話的で深い学び」という名前で幼稚園から大学に至るまで、アクティブ・ラーニングを導入することとなりました。

小中高大学ではどんな授業方法が良いのか、様々に授業研究がなされたり、アクティブ・ラーニングの手引書が出版されたり、教員向けの講座が開かれたり、自主的な勉強会が開催されたりと、様々に試行錯誤しつつ、それぞれのよりよい方法を模索している最中だといえます。実際私も、とある大学の授業用のシラバス作成にあたり、ある年度から各授業のアクティブ・ラーニングの方法について、授業内容に合わせて設定した上、学生に公開することになり、面食らったことが

あります。

一方、幼児教育や保育の現場では十数年前から「主体性を大切にした保育」「対話的な保育」という言葉は頻繁に使われていました。2017年の学習指導要領の改正時には、幼稚園の要領にもこの言葉が入りましたが、小中高大学ほどの混乱はなかったような印象を持っています。

しかし、実際に、何をどうすることが「主体性を大切にした保育」「対話的な保育」なのか、というと、その基準は大変抽象的です。「主体的・対話的な幼児教育（あるいは保育）をしている」という幼稚園・保育園はいたるところにあります。いや、逆に、ありすぎるのです。

### 「主体性」「対話的」とは？

ある就職活動中の学生が、沢山の園を見学した後、要約1つの園の就職試験を受けると言いに来ました。

「どこに見学に行っても“主体性を大事にした保育”って言うてはるんです。本当に、どこに行ってもね。」

「幼稚園や保育園のホームページを見るでしょ。ほぼ絶対、“子ども達の主体性”とか“子どもの気持ちを尊重した教育”とか“対話を大切にしたかわり”って書いてあるんですよ」

「でも、だから何をどういうふうに工夫してるっていう、特徴や考えが見られるところは本当に少なかったんです。」

「別に変変わった取り組みをしているところがいいとか、そういう意味じゃないんです。逆に変わった取り組みでごまかしているような園はたくさんあるんで

す。」

「でも、今回就職したいと思った園は違ったんです。“主体性って何だ？”って、先生方みんな考えて、それを実践に移している園やと思ったんです。」

彼はこの園の理念に共感し、就職試験を受けて見事合格、今ではいきいきと働いています。

幼児教育・保育の場では、小中高大学に先駆けて、「主体性を大切にした保育」「対話的な学び」という課題に取り組んできました。しかし、それが上手に成熟し、今も成長を続けている園と、そうではない園があるように感じています。どちらかという「主体性」「対話的」という言葉は、様々な保育現場で使われすぎて、言葉が独り歩きし、残念ながら形骸化しつつあるケースも多いのではないかと、思うのです。

### 保育者の対話の場をつくりたい。

子どもに対する支援について考える時、私は最近、「まずその支援者が、そのような扱いをされたことがあるのか」という事を考えます。その行為のよさ・悪さに関わらず、自分がされたことがある行為ならば、そのように扱われた時にどのような感覚がおこり、身体的な反応があり、思いがわきあがるのかを体感的に理解しやすく、その経験が自らの支援に強く影響するのではないかと考えるためです。

今回ならば、子どもに対してどう対話的に接し、どう主体性を尊重するのか、

という方法論の前にまず、「幼稚園教諭や保育士、保育教諭（以下、まとめて保育者とします）は、対話的な場で、主体性を大切にされた経験があるのか」という点を問いたいと思うのです。

もしもそういった経験が少ないならば、対話的な場を経験し、主体性を大切にしたコミュニケーションを経験してみる場を作れないだろうか。

そう考えて私は、保育者に向けた、対話的な場を作りたいと考えました。

このアイデアを、長年保育士をしている友人に聞いてみました。すると、「うーん…保育士ってあんまり孤独やないからね…。」

とのお答え。

「どういうこと？」

「女の人が多いし、なんだかんだ言っておしゃべりするから。別に対話っていう場がなくてもええんやないかなあ」

「そう…いいアイデアやと思うんやけどなあ。」

実は私は、対人援助者が集う対話の場を2年以上続けています。広くオープンに参加できるようにしているのですが、児童分野の人、保育関係の人はなかなか参加に結びつきません。高齢者分野や障がい者分野の専門職、また子ども分野でも障がい児分野の専門職は、面白がってよく来てくださるのです。

「やっぱり、保育園や幼稚園の先生たちには、対話の場っていらないのかなあ…」

## 私の違和感

いやしかし、本当に保育者さんには対話の場をわざわざ設定する必要はないのでしょうか。

確かに、個々人のレベルで見ると、熱い先生、面白い先生、子どもの事を大切に考える先生などはたくさんいらっしゃいます。また、組織全体が元気でいきいきとしている園はあります。

しかし、なにより、私自身の違和感があります。

だいたい、保育士・幼稚園教諭の退職に関するどのような統計を見ても退職理由の上位に「職場の人間関係」があるのです。

それに実際に、職場での人間関係に悩み、話を聴いてほしいと駆け込んでくる卒業生がいます。お話をしに来てくれること自体は全然かまいません。むしろ久しぶりに顔が見られる機会は嬉しいのです。でも、卒業してしばらくたって、新しい社会で新しい社会関係をつくっているだろうに、そこでこんな話を出来る人がいないのか…と思うと、何とも言えない痛みで、ぐっと胸が詰まっています。

また、こんな経験もあります。

ありがたいことに、対人援助や教育、福祉の分野の専門職の皆様の職場や法人に、研修講師として呼んでいただくことがあります。この際、受講生の皆様が同じ事業所内ではなく、その地域にある様々な事業所・法人から集まってくる場合などは、やはり初対面の方々同士ですので、緊張も高い様子。私の講座はグル

ープワークが多く、打ち解けるためのアイスブレイクが必要です。

とはいえ、人と接するお仕事に就いていらっしゃるみなさんです。誰かが口火を切り、話し始めると、徐々に打ち解けていきます。グループ内で発表者を決めたり、発表の段取りを話し合ったりと、恥ずかしがりつつ遠慮しつつも誰かが腹をくくって率先して動いてくださいます。

ところが、ほんとうに稀に、こういったグループワークが大変進みにくい時があります。

いろんなケースがありますが、今まで何度か、保育者だけで構成されたグループが動きにくい、ということがありました。例えば、グループワークの時間が始まったのに、誰も口火を切らず、グループ全員がぐっと押し黙ってしまう。発表者を決めるにも「私はそんなことできませんから…」 「いやいや、私も無理…」 「わかんないです…」 と、遠慮しあう。作業の進め方がわからないが質問をせず、グループ全体が困ったように黙っている。こちらから「大丈夫ですか？」と声をかけるとはじめて「これ、何をどうするんですか」と聞いてこられる。再度解説すると、同チーム全員が「ああ、なるほど…」とうなづき、やっと作業に取り掛かる…

「そうそう！！」

と、ある元幼稚園教諭さんがおっしゃいました。この方は安本志帆さん。生きづらさを抱える人や幼児から大人まで様々な人との哲学対話を実践しておられる、「対話」のプロフェッショナルで

す。

「ある幼稚園で、壁にはってある絵を見た時、例えばライオンの絵だったら、みんな同じ向きで同じ表情のライオンが描かれている、なんていうことがあって…」

「私が働いていた園は、子どもも職員も話し合う事をすごく大事にしていたから、そんな絵を貼り出そうものなら、すぐに「なんでこうなるの？」という質問がとんできたと思います。」

「様々な園を見ると、そのライオンじゃないけど、なんだか妙に子どもが“同じ方向を向きすぎている”ような印象を持つ園が時々あって…。そのような保育のあり方に疑問を持たないという保育者の態度は、業務の中でも、同じ方向を向くことが当たり前だったりするのかな？なんて感じてしまうんです。」

…確かに、そういう園で保育者をしている人は、独自の個性や自分なりの考え方で動くよりも、「同じ方向を向く」「同じ支援をする」ことを目指す仕事になってしまうのかもしれませんが。そのような仕事をするためには周りとは歩調を合わせる大きな目標になりますから、保育者それぞれが「自分の意見を出す」「自分の考えを言う」という振る舞いからは遠ざかってしまうかもしれません。

以上のような私自身の実感に基づくと、やはり、保育者の方々が「対話的、主体的でいられる場所」が必要だと思うのです。そのためにはまず自分の言葉を自分のお腹から、本当の思いを発してもよいと思える安心感のある場、そのよう

な話をしても、きちんと聴いてもらえる場を、保育者自身が体験する必要があると考えます。

### 3種類の対話

先日、立命館大学で行われた第34回国際障害者年連続シンポジウム「自立生活運動・オープンダイアログ・当事者研究」において、東京大学の熊谷晋一郎先生と、兵庫大学の竹澤寛先生、それに会場の参加者を交えたトークの中で「対話には3種類ある」という話が出ました。「問題解決のための対話」「共有するための対話」「違いを知るための対話」の3種類です。

一般的に企業や社会的な集団で行われている対話は「問題解決のための対話」です。答えを見つける対話です。

いわゆる共感するとか、理解を深めるような対話は「共有するための対話」です。相手と自分の感覚をすり合わせる、同じ価値観や同じ理解に落ちつく会話です。

3つめの「違いを知るための対話」、これはお互いの認識や考えの違いを知り、相手を知る対話です。

(ただ、私は対話は「～のために行うもの」ではないと思っています。「～のための対話をする」というより、「～という対話になる」という感覚の方が、日々の対話の感覚に近いように感じます。以下、上記3つの対話を「問題解決の対話」「共有する対話」「違いを知る対話」と表記します)

このやりとりを聞いた時に、あ、そうか!と感じました。

この国には、会社や学校における、文明を構築するための「問題解決の対話」がメインストーリーミングに存在し、これとともに、家庭や友人関係といった文化的な生活の中での「共有する対話」が存在します。その一方で「違いを知る対話」はとても少ないか、日常コミュニケーションの支障になるものと考えられがちなのではないでしょうか。

特に保育現場はエモーショナルな心の触れ合いが重視されるため、「共有する会話」が多用される現場です。なぜなら、受容的な感情のやり取りは保育の基本であり、そのやり取りが安心した環境の中で行われることは、子どもはもちろん、保育者自身の安心につながるからであり、場の安定に直結するためです。保育者が安定していれば、様々な保育を想定内で行いやすくなります。子ども達の落ち着きを確保することが出来ます。

ですから、安定した場を作る事を大切にするタイプの保育者にとって、第三者との関係性の中に「違いがある」という事は本当に恐るべき、避けるべき非常事態になるのかもしれない状況に対して、極端に注意深くならざるを得ないのではないでしょうか。だから、初めてあった人、よく知らない人、つまり「明らかに自分と違う所が多くある人」に対して、「違いを知る対話」にならないように、警戒心が強くなってしまわないのでしょうか。

## 他者の不在

先日、言語学の論文を読んでいて、なるほど、と思ったことがありました。

ある非常に親切な老人が、ヒヨコを飼っていた。冬の日、あまりに寒かろうと思ってお湯を飲ませた。その結果、ヒヨコは皆死んでしまった。つまり、「日本人の親切は、自分の感情を相手に移入してしまうものであり、そこにいるのは相手ではなく自分自身なのだ、ということである」「自分は水を飲むのは冷たいからいやだ、きっとヒヨコもいやだろうと勝手に感情移入する。自分の感情を相手に移入し、それを充足させ、それで相手への同情とみなしてしまうのである。」

さらには、

「日本人はひとりよがりであり、純粹に相手の立場に身を置く一つまり同情する一という事が本来的に得意ではない、というよりそもそも日本人にとって自己と対立的な他者は不在であり、相手はいわば自己の延長なのだ。これが日本人の基本的な意識構造をなすものであり、したがってそれは他にも日本文化の様々な局面に姿を現し、日本人の行動様式に深い影響を及ぼしている事が予想される<sup>1)</sup>」

「そもそも日本人にとって自己と対立的な他者は不在」、つまり自分と異質なものに対して、どう向き合えばいいのかわからず、慣れている方法、知っているやり方、常識と思い込んでいる考え方

が通じない状況・相手だと思った時に、相手を不在として扱う、という振る舞いは、実は私も思い当たります。いや、もちろん全く無視をする、存在を認めない、という意味ではありません。

「そういう人もいるんだねえ」「そういう考え方もあるのねえ」といって、相手の存在を認めたふりをして距離を置く。あるいは、見ないふりをする。あるいは、関わらないようにする。正直に言うと、そういった無視の仕方を、私もしたことがあります。「共有する対話」にならないと思うと、無意識に「違いを知る対話」を避けてしまうのです。

保育者は、古くは太平洋戦争の前から、社会的なニーズに応じて名前や必要とされる業務が少しずつ変化しつつも、機能してきた仕事です。特にその業務においては、子どもや保護者とのエモーショナルな関わり合い、生活の中での関わり合いがその大部分を占めます。理知的・理性的なものが優先される文明性よりも、感情的・感性が優先される文化性の影響を大きく受けるお仕事です。上記したような行動様式も深く影響している可能性があります。

## なぜ「違いを知る対話」を避けてしまうのか

「共有する対話」が多い事が良くないという意味ではありません。共有したい、通じ合えたらいいなという気持ちで話をするのは自然なことだと思います。特に保育の現場では、上記したように「共有する会話」が大変重要です。しかし、

「違いを知る対話」になることを避けようとしすぎないほうがいいのかもしれませんが。

なぜ違いを知る対話は避けたいのか。不安定な感情、例えば面倒くささや怖さといった感情が生まれるからだと思います。

何が面倒で怖いのか。相手とケンカになったり、相手を失望させたり、相手に失望したりといったマイナスの感情が発生する可能性があるからではないでしょうか。

なぜマイナスの感情になりやすいのか。「相手に自分の意見を受け入れてほしい」と思っているから、相手が変わってこちらの正しいと思う方に従ってほしいと思うため、ではないでしょうか。

なぜ、相手に変化してほしいと思うのか。相手との違いを知った時、自分の認識や想定を相手の思うように変えることは、大変ストレスになってしまうためではないでしょうか。相手と自分は違う人間であり、相手もまた、変化するには大きなストレスがかかるはずなのに、相手に代わってほしいと思う、しかし、相手を自分の思い通りに変化させることは出来ません。

映画『降りてゆく生き方』の総合プロデューサーである森田貴英さんは、以前、ツイッターで「私の意見は正しい。相手は間違えている。よって、相手がかわらねばならない」という考えに固執している限り、対話は成立しない」「対話」とは、「自分が変わること」にこそ本質がある」と述べていらっしゃいました。

心身の障がい、暮らしむきの状態、常識とする生活様式、出身国、性のあり方…あらゆる多様性が認識され、様々な格差がある時代、何が「普通」なのかはつきりしないこの時代に、社会の中で生きて行こうとすると、「違いを知る対話」を避けることでは対応できない事案が増えてきています。

その中で、自分が変わらず、安定し、変化することを避けることは難しいのではないのでしょうか。

安定的な環境を目指すよりも、むしろ安心して不安定でいられるような環境、いつでも変化可能な自分でいられる環境こそが大切ではないのでしょうか。

### 「違いを知る対話」に慣れること

では、同じ福祉分野でも、高齢者や障がい者の分野の支援者の人と、保育分野の人は何が違うのでしょうか。それは、高齢者分野や障がい者分野の対人援助者が、否が応でも意見の違う人と「違いを知る対話」をする場面が多い、ということではないか、と思うのです。

本人とその家族の意見が合わない時にどうするか、本人の希望を叶える社会になっていない中でどう生きていくか、社会のあり方と本人の希望の落としどころはどこになるか、ということと一緒に考える。これらの分野の専門職は、支援の中で「自分と違う存在と、どう一緒に存在し続けるか」という問いによくぶつかるのではないのでしょうか。そしてそのやり取りの中で、自分も変化しつつ、相手も変化していく体験に慣れてい

っしやるのではないのでしょうか。

しかし、保育分野は、誰かや何かとの違いに出会うと「出来るだけ同じ部分、共感できる部分」を探して、それに寄りそう努力をする。そうして「共有する対話」に結論を持っていこうとする。それが「安心・安全な場の確保」につながる方法になる、という論理が存在しやすい場なのではないかと思うのです。

「違う部分がある、どうしても相いれない部分がある。だけど、いや、だからこそ、あなたと共にいたい」「違いがあるからこそ、お互い一緒に変化しあうことが出来る、この社会でいっしょに生きていける」といった視点は、もともと保育や幼児教育の場面では言われているはずなのです。その手法は、出来るだけ共感的で安定的な場を作る、という方法ではなく、いつでも不安定でいられる、変化できるという安心と信頼のある環境の確保が出来るような方法をとるほうが、子どもにとっても、保育者にとっても、生きやすい場になるのではないかと感じるのです。

### **さて、では具体的に何をしましょうか。**

多様性の現代、違いを喜ぶという姿勢を単なるお題目にせず、どのような子どもであっても安心・安全に多様であっていいと思えるような支援をするためには、まずは保育者同士が、保育者同士の多様性に対して、どのような態度をとるのか、という所だと思います。子どもや

保護者が多様になってきていることと同様に、保育者も多様になってきているのです。

そのためには、保育者それぞれが「共有する対話」「問題解決の対話」だけでなく「違いを知る対話」をも安心してできる場の環境に慣れること、そのような対話の文化の醸成が必要ではないかと考えています。

では、具体的にどうすれば保育者に「対話の場」の環境設定が出来るのか、「対話の文化」の醸成が可能なのか、そのためにどういう仕掛けを作る必要があるのか。それらについて、どんなことが出来るのか。

これについては、色々とトライ＆エラーを繰り返しながら、考えていきたいと思えます。

#### 引用文献)

- 1) 中央教育審議会 答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』 平成24年8月28日
- 2) 斎藤伸治「日本語と日本文化のモノログの性格について」アルテス リベラレス (89), 49-62, 2011-12 岩手大学人文社会科学部